

㍻

日本の詩歌

19

飯田蛇笏
水原秋桜子
山口誓子
中村草田男
荻原井泉水

中央公論社

飯 田 蛇 笏
水原秋桜子
山 口 誓 子
中村草田男
荻原井泉水

昭和44年 8 月 5 日初版印刷
昭和44年 8 月 15 日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

飯田蛇笏

山廬集

靈芝

山響集

白嶽

春蘭

雪峽

家郷の霧

椿花集

9

41

48

57

63

68

70

74

水原秋桜子

南風

葛飾

秋桜子句集

新樹

秋苑

岩礁

蘆刈

古鏡

重陽

霜林

81

88

96

98

101

104

106

109

115

117

炎 黃 凍
星 旗 港
山口誓子

晚 旅 蓬 玄 婦 殘
華 愁 壺 魚 心 鐘

168 163 153

147 144 141 136 130 124

中
村
草
田
男

青 方 構 和 青 晚 遠 激 七
銅 位 橋 服 女 刻 星 浪 曜

217 214 209 205 200 195 189 183 175

長流	原泉	荻原井泉水	美田	母郷行	銀河依然	来し方行方	万緑	火の島	長子
313	297		282	276	268	253	246	230	223

井泉水近什

詩人の肖像

鑑賞

年譜

山本健吉

安東次男

村野四郎

飯
田
蛇
笏

山廬集

鈴の音のかすかにひびく日傘かな

明治三十七年以前

白菊のしづくつめたし花鋏

芥火に沈丁焦げぬ暮の春

明治三十九年

草籠の蔭に雉子や春の山

旧山廬訪へば大破や辛夷咲く

就中学窓の灯や露の中

露草に落ち木もあまた端山哉

『山廬集』は、飯田蛇笏（本名は武治）の第一句集。昭和七年十二月、その主宰誌『雲母』の発行所（山梨県東八代郡境川村）より刊行された。明治三十七年以前にさかのぼる句から昭和六年の吟まで、一七八四句を自選して収める。高浜虚子の弟子というよりもむしろ同輩として、『ホトトギス』初期から重きをなし、大正七年以来『雲母』を主宰して、そのまれに見る雄勁かつ浪漫的な句風を高く評価されてきた大家としては、処女句集の刊行のこの遅さは、異例のことに属する。明治四十二年（二十五歳）以来東京を去って家郷に隠棲し、もっぱら田園の生活に親しんだ著者の反骨の、しからしめたところであらう。

序にいう、「なにが世のなかくて最も地味な為事か」といって、俳句文芸にたずさわるほどな地味なものは外にあるまいと思う。芭蕉の

あら浪に千鳥たかしや帆綱巻く

花の風山蜂高くわたるかな

明治四十年

つみためて白尻に撰る蓬かな

松伐りし山のひろさや躑躅咲く

短夜や藺の花へだつ戸一枚

晒引く人涼しさを言ひ合へり

草庵の壁に利鎌や秋隣り

泉石をはづるゝ滝や青嵐

かりそめに燈籠おくや草の中

無花果の門の格子や水を打つ

雷やみし合歡の日南の旅人かな

生活をながめてみても、彼が自家の集を生きようのうち一つさへ出版していなかったということを思うても、実にうちしずんだ極端なものである。しかしながら、そのおもてにあらわれたところはそんな果敢なげな深沈なるものであったに違いないにしても、彼の心のゆたかさに想い及ぼすとなると、必ずしも外面に打ち見られるようなものではなかったと思う。私は、少年のころからそれを古金襴を見つような気持でながめて来た。いっつか、自分の生活がその古金襴のくすんだ微光を追うて、俳句生活に入っていることが自覚された。

句の配列は、句集では逆年順をとり、それぞれの年の中で春夏秋冬に分類されているが、本集では仮に旧より新へ年次を変更して取めた。ただし、年間の句順は、春夏秋冬の別を取り去っただけで、

とりいでゝもろき錦や月の秋

明治四十一年

はつ嵐真帆の茜に風ぎにけり

炊ぎつゝながむる山や露のおと

はつ汐にものゝ屑なる漁舟かな

炉辺よりこたふる妻や秋の蚊帳

みづどりにさむきこゝろを蔽ひけり

月光に燭爽かや灯取虫

牡丹白し人倫を説く眼はなてば

山に遊ぶ水車の鶏や神無月

炉ほとりの甕に澄む日や十二月

湯屋いづるとき傘の雲かな

明治四十二年

変更してはない。

「はつ汐に」の句、初汐が季語である。陰曆八月十五日の満潮をいう。葉月潮ともいい、一年中で潮の満干がいちばん大きいときにあたるところから、潮さす勢いも特に強い。「ものゝ屑なる」といい捨てたところ、工夫であると同時にこの作者の自然観の一端でもある。べつに漁農農視の思想があるわけでもないが、さりとしてないともいえぬ夫人の風貌がこの作者にはあり、木の葉のようにもまれる漁舟をあわれと見るよりは、そういう人間の営みの小ささを蔽う大自然の力の方に、いっそ惹かれてゆく態度がよく表われている。

「牡丹白し」の句、この句も、べたべたとした人間関係をつき放した、非情な目に魅力がある。「眼はなては」とはそういう表現であ

煮るものに大湖の蜆や夏近し

明治四十三年

貝寄や遠きにおはす杣の神

貝寄や南紀の旅の笠一つ

吉野山奥の行燈や一の午

梅林を柩舁きゆく漁人かな

昼寝覚め厨にみてる魚介あり

膳さきへかたむく桑や蚤の宿

蟬鳴くや瀬にながれ出しところてん

鴨足草雨に濁らぬ泉かな

ひぐらしの鳴く音にはづす轡かな

鐘の日や遅く暮れたる山の鐘

明治四十四年

る。作者は、説いて所詮甲斐のない相手に、説くことの無意味さ、厭わしさを、ふと感じる。そのとき目を移した庭前の白牡丹のまわりに、空気の密度が凝縮し、冴える。夕方、それとも夜であらうか。

* 貝寄 貝寄風。陰曆二月二十日前後に難波の浦辺に吹く西風をいう。大阪四天王寺の聖霊会（陰曆二月二十二日）の供養花を、この風が吹き寄せた貝殻を拾い集めてつくるところから名が生れたともいい、また、この時季の高波で浜辺におびただしい貝殻が打ち上げられるからだともいう。

* 一の午 初午。二月はじめての午の日の祭礼。現今では稲荷信仰として行われているが、もともと豊年祈願の田の神信仰行事である。

山越えて来てわたる瀬や柳鮪やなぎはえ
 しづかさや日盛りの的射ぬくおと
 あつ過ぎる行水ぎやんすいにさす日影かな
 いとゞしく月に蚊火たく田守たもりかな
 秋蛭あきがへやあした夕べの炉火ろびの紅
 鳩吹はとふくや夕日に出たる山の墓
 短日のはや秋津嶋灯ともしけり
 ありあけの月をこぼるゝちどりかな
 葱わぎの香に夕日の沈む櫓たねばやし
 牧へとぶ木葉にあらぬ小鳥かな
 畑打や代々よよにつたへて畠はたの墓

明治四十五年（大正
 元年）

* 柳鮪 とくに鮪という魚の種類があるわけではなく、地方によっていくらか異なる。春先のウグイ、モロコなどを総称すると考えてよく、体形が柳の葉に似ているところから柳鮪と呼ばれるが、単にハエ、ハヤといっても同じものである。水に映った柳の葉影と、鮪の影は、いっそうまぎらわしい。

* 鳩吹 人声で山鳩の鳴声を真似ること。鳩笛を吹くことも。いずれにしても、眞師が小鳥や鹿などを誘い寄せるために、囀めどりがわりに用いるものである。秋季。

「短日の一の句 日本というかわりに「秋津嶋」といったところが工夫である。漠然とした地理的描がりでなく、かといって単に精神的な風土でもなく、作者の目に映っている暮れ早い冬の日の山河の形象がそこにあることが読者に

門 前 の 花^{はな} 菜^な の 雨 や 涅槃^{ねはん} 像^{ざう}
 野 お ぼ ろ に 水^{みづ}、口^{くち} 祭^{まつり} 過 ぎ し 月
 二 三 人 薄 月 の 夜 や 人 丸 忌
 雪 掃 け ば 駅 人 遠 く 行 き に け り
 踏 切 の 灯 を 見 る 窓 の 深^{ふか} 雪^{ゆき} か な
 ふ る さ と の 雪 に 我 あ る 大^{たい} 炉^ろ か な
 湯^{たう} 婆^ば こ ぼ す 垣 の 暮 雪 と な り に け り
 道 具 市 水 仙 提^さ げ て 通 り け り
 ゆ く 春 や 流^る 人^{にん} に 遠 き 雲 の 雁
 ゆ く 春 の 人 に 巨^{きよ} 帆^{はん} や 瀬 多 の 橋
 古 き 世 の 火 の 色 う ご く 野 焼 か な

大正二年

もしかと感じられ、うまし国日本
 への共感を誘う。眼下遠く、山国
 の暮色の野に、ちらつきはじめた
 燈火であらう。

* 水口祭 苗代祭ともいう。概^概を
 苗代におろすときに行う田祭。田
 の水口に盛り土をして、幣や小枝
 を挿し米などをそなえる。

* 人丸忌 柿本人麻呂の忌日。陰
 暦三月十八日とされているが、真
 偽不詳。

* 西行忌 西行は建久元年二月十
 六日、河内弘川寺で入寂した。一
 般には涅槃の日（陰暦二月十五
 日）を忌日としている。